
Fate/ Destroy

究極の混沌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / D e s t r o y

【Nコード】

N 0 8 1 0 Z

【作者名】

究極の混沌

【あらすじ】

F a t eの世界にサーヴァントとして送られたその人間。彼は一体その世界にてどんな運命を切り開くのか・・・

1、召喚されしは・・・（前書き）

この小説は作者の自己満足にて創作されています。そのところが不満な方はブラウザーバックしてくださいますようお願いします。

1、召喚されしは・・・

ある夜、間桐の地下にてとあるサーヴァントが呼び出された。その場に在る二人は、表情は違えど二人ともその顔に喜びを表していた。

間桐雁夜、此度の聖杯戦争のマスターの一人だ。だが、素質がありながらも魔術師としての鍛錬をしなかった彼はほかのマスターに比べるとかなり劣るものだった。それ故に、パラメーターを引き上げるために狂化のスキルを持つバーサーカーを必然的に呼ぶことになった。

そしてもう一人は間桐蔵硯、間桐の初代にして化け物となつてまで生きながらえている爺クソ

雁夜は、その身に宿した刻印虫により即席の魔術師として成り立つてはいる。だが、体は刻印中に蝕まれてもう一年ほどしか寿命が残されていなかった。召喚により衰弱し、床に這いつくばいながらもひび割れた笑みを浮かべた。

蔵硯は、弱つて死にかけている雁夜を満足そうな表情で眺めていた。

「や、やつた・・・成功だ。」

呼び出されたサーヴァントは黒炎を纏い漆黒のフルプレートに身を包んだ男だった。ただ、それからは禍々しい気配・・・刺さるようなプレッシャーが感じられなかった。そしてもう一つのこと蔵硯は顔をしかめた。そのサーヴァントから向けられた自身へのみ向けられた強大な殺意。

そして、その殺意に感ずいたときには蔵硯はサーヴァントに頭を掴まれていた。

「なっ!？」

「なにを!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言のサーヴァントは、なんの素振りを見せることなくその頭を握りつぶした。

蔵硯は元の体を捨てており蟲たちで体を構成している。そのくらいでは死なないはずだった。が、潰された頭の部分から蟲たちが悶え死んでいきそこには虫の死骸だけが残った。

あの化け物がいとも簡単に死んだ事に啞然とする雁夜に突然激痛が走る。

「ぐうっ、これは・・・!」

おそらく蔵硯が死んだ事により体内の刻印中が暴走しているのだろう。弱っている雁夜にとってこの状況は非常にまずい。このままでは彼は暴走する刻印蟲に体を食い尽くされ死ぬだろう。

すると、サーヴァントは雁夜の方へ向き直りその手を伸ばす。

そして、そこで雁夜の意識は途絶えた。

SIDE???

「マスターは気を失ったか・・・蔵硯の抹殺、間桐雁夜と桜の救出、聖杯の破壊、残る目的は1つ・・・」

サーヴァントはその手にもつ蟲を握りつぶし、居間に横たわっている桜と雁夜を見て、自分の鎧に包まれた手を見つめる。

「運命、か・・・」

設定

クラス デストロイヤー（イレギュラー） 真名？？？

身長 186 cm 体重 75 kg

属性 混沌・善

イメージカラー 漆黒

特技 家事

好きなもの 昼寝 美女 嫌いなもの 慢心、偉そうなやつ

天敵 なし

容姿 黒の長髪、紅眼で整った顔立ちをしている。

ステータス

筋力 A++ 魔力 EX

耐久 A 幸運 B

俊敏 A+ 宝具 EX

イレギュラーサーヴァント、その正体は転生させられた fate の人間。

普段はランスロットの漆黒の鎧を纏っている。

神の暇つぶしで殺され Fate の世界に送られたのだが、本人は生前無意味な生き方をしてきたため後悔はない。一応ある程度の知識をもっているため、目的がある。

性格は冷静沈着。神に要求した内容がアレなせいで凶悪なほどに強くなった。ただ、魔力無限を頼んだところ、マスターから魔力をもらうどころか逆に魔力がマスターに流れ出す事態になる。

スキル

対魔力 A++

心眼（偽） A+

精霊の加護 A

騎乗 A+

宝具

全て遠き理想郷

アヴァロン

ランク：EX

種別：結界宝具

レンジ：

防御対象：1人

妖精モルガン（モルガン・ル・フェ）がアーサー王から奪った聖剣の鞘。

不老不死の効果をもし、持ち主の老化を抑え、呪いを跳ね除け、傷を癒す。

真名解放を行なうと、数百のパーツに分解して使用者の周囲に展開され、この世界では無い妖精郷に使用者の身を置かせることである。ゆる攻撃・交信をシャットアウトして対象者を守る。それは防御というより「遮断」であり、この世界最強の守り。

魔法の域にある宝具で、五つの魔法さえ寄せ付けず、多次元からの交信は六次元まで遮断する

グングニル
大神宣言

ランク：B

北欧の主神オーディンの槍

幾度交わされようとも必ず相手を貫く効果を持つ。ただ、当たる箇所までは指定できない。

騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）

ランク：A+++

種別：対人宝具

改造したことでどんな武器、どのような兵器であろうとも（例えば鉄パイプでも、小石でも）手にした時点でBランク相当の擬似宝具となり、元からそれ以上のランクの宝具を手に取りれば従来のランクのままバーサーカーの支配下に置かれる。

己が栄光のためでなく（フォー・サムワンス・グロウリー）

ランク：A

種別：対人宝具

自らのステータスを隠蔽する能力。その他にも相手に成り代わる能力も持っているようだ。

無毀なる湖光
アロントライト

ランク：A++

種別：対人宝具

絶対に刃が毀れることのない名剣。

上記二つの宝具を封印することによって解放できる。バーサーカーの全てのパラメーターを1ランク上昇させ、また、全てのST判定で成功率を2倍にする。更に、竜退治の逸話を持つため、竜属性を持つ者に対しては更に追加ダメージを負わせる。

オリジナル宝具

因果繰る魔手（カウザル・クリエイト・ディストラクション）

ランク：EX

種別：対人宝具

その手で触れた物とあらゆるものの繋がり、因果を操ることができる。が、魔力消費が激しすぎるため一度使うと自分に魔力が貯まるまでの一定時間宝具など魔力を消費する物は使用不可能になる。その者の存在だろうと命だろうと関係がある限り可能。相手のスキルにも使用できるが、ワンランク下がる上引き剥がすことはできない。

使うには、因果を操る物の片方を触れればいい。

例（・桜に触れる ↓ 虫との因果を絶てる

・サーヴァントに触れる ↓ そのマスターに関して因果干渉できる

といった具合。

ただ使いどころを考えないと前述のように宝具使用不可になるため危険な状況になってしまう。

設定（後書き）

いろいろやりすぎました。

2・無名のサーヴァント

SIDE 雁夜

ここはどこだ？・・・なんで俺居間にいるんだ？確か俺はサーヴァントを召喚して、そのサーヴァントが臓硯を襲って、そうだ、俺はあのあと気を失ったんだ。

「！？そうだ、桜は！」

俺はすぐに周りを見回す。だがそこにはあの娘がいなかった。

「まさか、まだ蟲蔵に「雁夜おじさん？」桜！」

廊下に台所のある方から桜が出てくる。その顔色は、蟲蔵にいた時よりもはるかにいいものだった。それに何となく以前よりも元気そうだった。

「桜、大丈夫か？ケガはないのか？」

「うん、あの人が助けてくれたから・・・」

「あの人？」

あの人とは誰のことだろうか？兄さんはまずありえないだろう、臓硯？あいつは俺の目の前で死んだし桜を自分から解放するなんてありえない。だとすると・・・

「ねえ桜、その人ってどんな格好だった？」
まさかな・・・

「えっと、大きくて黒い鎧を着てたの。」

「な、なんてこった。何もされなかったかい？」

「私の体から虫をとってくれたの、雁夜おじさんの体からももういないよ。」

「なっ!？」

桜の虫は俺と違って心臓に植え付けられたものだ。下手をすれば心臓を傷つけてしまい桜が死んでしまうことになってしまう。それを、あいつは難なくやり遂げたというのか・・・

なにものなんだ？あいつは。

「マスター、起きたのですか？」

すると、台所から黒髪の少し身長の高い男が鍋をもって台所から出てきた。

「誰だお前？」

「お忘れですか？あなたの召喚したサーヴァントです。」

「は？俺が召喚したのはバーサーカーのはずだ、なんでしゃべれるんだ？」

「別にバーサーカーでも勇猛EX位のものだったら意識は保てると思いますけどね。あと説明するよりステータスを確認したほうが早

いかと。」

「あ、ああ……これは！」

俺は頭に浮かんだ情報にド肝を抜かれる。表されたクラスにも驚いた。だが、何よりも驚いたのはそのパラメーターだ。運以外の全てが最低Aランクで魔力と宝具はEXランクと言う化け物みたいな性能だ。

「これなら勝てる！あの時臣のサーヴァントに！」

S I D E ???

「これなら勝てる！あの時臣のサーヴァントに！」

時臣……たしかマスターの記憶にあったこの桜という少女の本当の父親。そして、この子がこんな目に合う羽目になった元凶の一人といえる。たしかに臓硯が養子を欲さなければこんなことにもならなかった。だが、その要請に応え桜をここへ送り込んだのは紛れもない遠坂家当主、遠坂時臣だ。

だからかもしれない、マスターがあつた男を恨んでいるのは、憎んでいるのは。つとわすれていた。

「あの、マスター。お粥が冷めてしまいますので……できれば早

く食べてくれませんか？」

「…………あ、ああ。」

雁夜は一瞬呆気にとられフリーズするが、すぐに再起動する。

「ほら、桜ちゃんも。」

「うん、ありがと。」

あゝ和む。前世ではこんなこと味わうことができなかったからな・
・まてまて性格変わってるぞ俺、落ち着けゝ落ち着けゝ。

きれいに完食された鍋を洗うサーヴァント、シユールな絵だ。
それに料理してる時といい鍋を洗っている時といいなぜか桜がじー
っと見てくるのはなぜだろう。聞いてもなぜか顔を赤らめて「秘密
ー」といつてどこかへ行ってしまう。

なんで？まあいいか。

「マスター、あなたに聞きたいことがあります。」

「なんだ？」

「あの化け物のいない今、あなたが聖杯戦争に参加する目的はなん
ですか？」

「決まっている、あいつを・・・時臣を殺すことだ！」

どうやら迷いはないらしい。まあ、俺はサーヴァントで彼はマスターだ。俺は従うだけ、まあ、目的も果たすつもりなんだが・・・問題の聖杯の位置を忘れていた今では無理か。

「そういえば、デストロイヤーお前の真名はなんなんだ？というわけかそれだけ見えないんだが。」

「ああ、それは俺に名前がないからです。」

「名前が、ない？」

おかしいことだ、本来召喚されるのは英霊すなわち歴史に名を残した者たちだ。そのサーヴァントに名前がないと言われれば誰だって驚くだろう。だが、事実俺には名前になるものがない。生前の名前は喋ることもできなくなっていたため使い物にならなくなった。そして、名前を決める前にここにきてしまったのだ。仕方のないことだ。

「まあ、そのうち決まるさ。」

「何かそのへんは理由がありそうだから聴かないでおく。あともう一つ。」

「なんですか？」

「さっきから、お前から流れ込んで来るこの膨大な魔力はなんだ？ステータスにもこんなことは書いてないぞ？」

「ああ、これですか。これは霊脈からおれが魔力を吸い上げているだけです。だから、基本的に俺が宝具を使ってもマスターから魔力を持っていったって枯渇することはまずないでしょう。」

「・・・そうか。」

なんだかもう驚かないぞみたいに返されたな。まあ、パラメーターとか諸々俺は逸脱してるからしょうがないと思うけど。

「どうやら他のサーヴァントが戦っているようだ。デスト、様子を見てきてくれ。」

「偵察ですか。・・・マスター？」

「なんだ？」

「別に倒してしまってもいいのでしょうか？あとデストってなんですか。」

「構わん、デストロイヤーの略だ。長いんだよクラス名が。」

「・・・納得いかない気がしますが行ってきます。」

SIDE三人称

深夜、冬木市の港湾区の一角を占める広大なコンテナターミナル。人払いがされたその地で、四体のサーヴァントが睨み合いの体制に入った。四体全てが世界に名の知れた遙か昔の英傑豪傑達だ。その殺気と緊張の満ちた空間で四体は未だに睨み合いが続いている。とくに、ポールの上にいる遠坂が召喚した全身金ぴかのサーヴァントはライダーが己の真名を問うたことでもかなりご立腹なようだ。

「我が拝謁の栄に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

怒れるサーヴァントアーチャーは背後に数多の宝具を待機させる。以前アサシンを葬った複数の宝具の射出、それを再現しようとしている。

その状況に周りはさらに緊張が高まる。そしてライダーのマスターが撤退を口にしようとしたその時だった。

「む？」

ライダーが誰もいない一角をみる、それにつられほかの皆もそちらを見ると突如黒炎が吹き上がり新たなサーヴァントが姿を現した。

「・・・・・・・・」

「なんだよあれ・・・」

ライダーのマスターであるウェイバーが呟く。現れたのは漆黒のフ

ルプレートを身にまとい、兜の隙間から見える紅い輝きを放つ眼光。そして殺気。その気配はおそらくバーサーカーなのだろう。実際は違うが……

「どうやらあれも厄介な敵のようね。」

「ええ、それにこう睨み合っていてはうかつに動くこともできません。」

「……………」

現れたサーヴァントは先程からじつとアーチャーを見続けている。そのことにアーチャーは間に触ったのか顔をしかめる。

「誰の許しを得て我を見ている、狂犬めが……」

アーチャーは先ほどライダーたちに向けていた宝具の標準をサーヴァントデストロイヤーへ向ける。

「せめてその散りざまで我を興じさせよ、雑種。」

そして、風切り音をたて凄まじい速さで射出された二つの宝具はデストロイヤーに放たれ、凄まじい爆発を起こした。

この程度か・・・英雄王

3 神槍 (前書き)

1
2 / 2 2
設定変更

3・神槍

アーチャーの放った宝具は爆炎を巻き起こしバーサーカーと思われるサーヴァントを吹き飛ばした、かに思えた。だが、炎のなかからは剣を持った無傷のサーヴァントが出てきた。

「なっ!？」

「奴め・・・本当にバーサーカーか？」

「狂化して理性を失っている割にはえらく芸達者な奴だな。」

「は？」

「なんだ、みえてなかったのか。あの黒いのは先に飛んできた剣を難なく掴み続く第二撃をたたき落としたのだ。」

無傷のサーヴァントは再びアーチャーの方を向くと、フルプレートで見えない目で睨む。

「その汚らしい手で我が宝物に触れるとは、そこまで死に急ぐか・・・犬! その手癖の悪さで持つてどこまで凌ぎきれるか、さあ見せてみよ!」

まもなく、アーチャーの展開した宝具の雨が再び降りかかる。彼は即座に戦闘態勢に入り、持っていた宝具で対応する。降りかかる宝具を叩き落としつつ、さらに強い宝具に手持ちを取替えまた振り払う。が、偶に捌ききれずに体に掠る。そして体内に内包したアヴァロンで再生する。その繰り返しが続いた。

最後に高密度の雷を纏った剣をその手で撃ち落とす。

「AAAAAAAAA!!!!!!」

雄叫びと共に度々地面に突き立てていた宝具を手に取り、アーチャー目掛けて投石するが、ポールにあたっただけでかすりもなかった。そして、アーチャーは狂犬如きに大地に立たされたのが腹が立ち怒気を漂わせてワナワナと震える。

「痴れ者が・・・天に仰ぎ見るべきこの我を同じ大地に立たせるか・・・！その不敬は万死に値する！」

アーチャーは怒り狂い背後に先ほどとは比べ物にならないほどの大量の宝具を展開する。

「貴様如きのかんげんで王たる我にに引けと？大きく出たな時臣。」

アーチャーは早々に展開していた宝具を収め、腹立たしそうに霊体化していく。

「雑種共、次までに有象無象を間引いておけ、俺とまみえるのは真の英雄だけで良い。」

するとバーサーカーと思わしきサーヴァントは先ほど持っていた宝具を投げ捨てるとセイバーたちの方を向いた。セイバーは構えようとすが、一瞬その鎧の間から見たバーサーカーの瞳を見て動きを止めた。

SIDEセイバー

なんだ今のは？バーサーカーの目から伝わってきたもの、それは懐かしげに何かを見つめる目、そして殺意と憤怒に満ちた目だった。

「セイバー、どうかした？」

「いえ・・・何でもありません。」

奴は私を知っている？いや、そういえばあの鎧・・・どこかで見覚えがある気がする。思い出せない、何か大切なことのはずなのに。あれは、誰だ？

SIDEデストロイヤー

やはり、暴走しようとするか・・・ランスロット。

セイバーをひと度見ただけで中から溢れ出す異様なまでの殺意を先程から抑えているのだが如何せん強力すぎる。このままだと俺自身が飲み込まれる・・・

「AA・・・aaaaaaAAAAAAAAAA
A!!!!!!」

つく、引つ張られる！？くそ！こんちくしょうが！

おれは暴走を押さえるため、とにかく地面に頭を打ち付ける。え？ 変？ そりゃあはたから見れば俺は頭がイっちゃった人だろうけどバ―サーカーって設定だしいいじゃん。

「（ガッン）Aa! . . . （ガッン）Aa! . . . （ドガァ！）A
aaa!! . . . uuu」

ようやく落ち着いた・・・つか強く打ちすぎた。頭がクラクラするさっさと退散する前に、ケイネスだけちよつと脅しとくか。理由？
なんとなくさ。

俺は何も持つてない右手に神々しい気配を放つ真紅の槍を出し、声帯模写で変えた狂い声のままこの宝具の真名を叫び宣言する。

「グングニル」

SIDE OUT

「な、なんだ？あの槍……」

ウェイバーは、突然バーサーカーが手に出した槍に驚きを見せる。正確にはその槍から感じる魔力にだ。とはいってもあれそのもののランクはBなのだが、バーサーカーもといデストロイヤーから流れる魔力によって本来の威力を少し上回っている。

「うむ、たしかにアレは危険だのう。まともに受けければ無事ではす

「まないだろう。」

ライダーも同意する。それだけあの槍は危険なものなのだ。もつともエクスカリバーには劣るが・・・

「グングニル」

バーサーカーが叫んだ瞬間、真紅の槍は一層輝きを増し、雄叫びと共にセイバーに向けて投げられた。セイバーはそれを受け止めようと身構えたが、突如槍はありえない曲がり方をして方向を変えた。

その先にいるのは・
・
・
・

「マスタアアアアアアア——！」

4・戰略的撤退・・・と召喚

グングニル

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

投げられた不可避の神槍が向かう先にいたのは……

「なにっ！？」

ランサーのマスターであるケイネスだった。ケイネス反射的に展開した水銀でそれを防ごうとした。だが、向かうは神の槍。こんなものでは持たないと思った。

カンツ！

そんなケイネスの考えを裏切るように槍はいとも簡単に止まった。

「は？」

あまりの出来事に皆啞然とする。狙撃しようとしていた切嗣もまた、狙撃体制のまま「え……!？」と声を漏らしてしまうほどだった。

それが、デストロイヤーの罠とは知らず……

はじめた槍は重力に引かれて地面に落ちていく。ことはなく突如空中でその勢いを取り戻し、再度飛んでいく。勢いの戻った槍は、反応しきれなかったケイネスの左腕を刈つ攫つていき、血飛沫がとぶ。

「マスター……！！！」

ランサーはマスターの救援に向かおうとするがそれをデストロイヤーが阻む。

「どけええええ！」

ランサーは、必死の形相で障害となっていてるバーサーカー（デストロイヤー）を退けようとするが冷静さを欠いたランサーの攻撃は雑把なものとなっており、バーサーカーはさきほど投げたはずの槍で受け流しつつも一步も進まなかった。なんとか振り切ろうとフェイントで躲した、がバーサーカーはそれを止めようと追う。

「はあああ！」

そして、その二人の間にセイバーが割り込みバーサーカーに切りかかる。乱入によりバーサーカーは足を止めざるを得なくセイバーに応戦する。

「いけ！ランサー。」

「・・・かたじけない。」

セイバーは見えない剣で斬り合いの中バーサーカーの槍を捌いてはたたき落とし隙を作ろうとするが何処に切りこもうとしてもその剣戟は槍によって止められたたたき落としははずの槍はその手から離れた瞬間にバーサーカーの手に戻っていた。

「くっ、さつきからどう言うことだ。なぜ槍が落とせない。」

終わりの見えない剣戟のぶつかり合い。その激しさを増していく戦

いはあつさりとした終幕を迎える。

SIDEデストロイヤー

このままでは融こつこだな・・・思ったより体が言うことを聞かない。

俺は、予想以上に体の順応が遅いため今は本来のステータスより少し劣っている状態にある。故にセイバー相手に防戦に当たるしかなかった。だが、突如簡易的な結界を張った間桐の屋敷の近くにサーヴァントらしき気配を感じた。つまりこれは

（アサシンか・・・マスターを狙ってきたか？）

いくら最弱の強さであるアサシンでも人間相手なら正面からでも殺すことはできるだろう。マスターが殺されても俺は魔力は無限にあるから消えはしないが桜ちゃんを一人にするのはダメだな。俺はサーヴァントだから数に入れてないけど。

（ランサーはマスターを連れて撤退したか・・・引き時だな。）

俺は一瞬だけ、二つの宝具を封印し一本の剣を取り出しセイバーをその剣ごと吹き飛ばした。

「ぐあ！」

セイバーは近くのコテナに叩きつけられよろめく。そして、本の一瞬俺がソレをしまうときに。見られてしまった。かつて自分

従い裏切りの騎士と呼ばれた彼の剣を。

「!?! あ、あなたは。」

俺はセイバーが言葉を紡ぎ終える前にその場を去った。

「あゝつかれた。」

とりあえず帰宅がてらアサシンをぶつ殺して晩ご飯を買ってきた俺は屋敷に着くなり寝そべってだらけていた。とても先程まで死闘を繰り広げていたものとは思えない姿である。

「帰ってくるなりダラダラするなよ・・・」

「おかえりー、デスト。」

呆れながらも迎える雁夜であった。桜はとても嬉しそうに駆け寄っ

ていき寝そべったままのデストロイヤーに笑顔を見せる。この際雁夜が羨ましそうな顔をしたのは秘密だ。

「ただいま、マスター、桜ちゃん。ああ、そうださっき近くにアサシンがいたから消しときました。」

「アサシン？あいつは脱落したはずじゃ・・・」

「何らかの方法で生きていたと考えるのが妥当でしょうね。あとこんなふうには俺のいない間にここが襲われたら困るんでひとつ対策を立てたいと思う。」

「何か策があるのか？」

「何単純な話・・・もう一体サーヴァントを召喚して護衛させればいい。」

「・・・はあああああああああ！？」

「おじさん、うるさいよお。」

余りの絶叫に桜は耳を抑えてビクツと震えた。

「う、ごめん。でもどうやってするんだ？もうサーヴァントは7騎揃っているんだぞ？」

「そのための令呪だ。俺に召喚しろと令呪で命じればなんとかなる。」

「令呪か・・・」

だが、令呪はたったの三つしかない。それに使えば残りは二つだけになる。万が一すべての令呪を失ったとき此奴が裏切らないわけじゃない。そんな雁夜の様子を見たデストロイヤーは少しため息をつき言い放った。

「マスター、疑うのは当然だが裏切るのなら俺は初めから宝具で令呪とのつながりを消しているはずだ。」

そう、彼の宝具『因果繰る魔手』は因果の接続と遮断が可能な宝具だ。それをもつてすればマスターとのリンクを立つことなど朝飯前だ。おまけに魔力が無限という規格外。裏切ることなど初めからできた。

「・・・そうだな、まだ少し腑に落ちないがいいだろう。桜もあいつを気に入ってるし（ぼそっ）」

「じゃあ早速儀式をはじめよう。思い立ったが吉日ともいうし。」

「しかし、誰を呼び出すつもりだ？」

「ああ、それは・・・『セイバー』だ。」

「はぁ・・・（もう驚かんぞ。いつのまにかこいつため口だし。）」

えーと、触媒のavanaughにおいて・・・血も準備OK。

「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

すると、描かれた魔法陣が眩い輝きを放ち、その中から人影が見えてきた。

少しゴツゴツとした漆黒の鎧とバイザー。若干青白い肌にバイザーの隙間から見える金色の目。そして、その手に持つのは最強の聖剣。

「問おう、お前が私のマスターか？」

4・戦略的撤退・・・と召喚（後書き）

いよいよ、オルタさん登場です。（。。）ヒャッホー――――

――

ええ、取り乱していません。今後ともよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0810z/>

Fate/ Destroy

2011年12月24日01時46分発行